学長からのメッセージ
共に、未来へ。

この夏、本学博士課程の大学院生が、理系の優れた女性研究者を顕彰する賞をうけました。彼女は、お茶の水女子大学で学び研究していることの感想を次のように話してくれました。

「私はこの大学に入学した時点では、ブランド力・少人数教育などといった、いわゆるお茶大のメリットが、表面的にしか見えておりませんでした。しかし、1年2年と経つうちに、ここで自分が変われたと感じ、大学院進学時には他の大学院への進学はまったく視野に入れませんでした。」

「自分が変われた」とこの学生が感じたのはなぜなのでしょう。

女子大学であるが故に、何をするにも全ての役割を女性が担い、「できる人が、できることをする」という風土が本学にはあります。そのために学生には新たな能力を発見するチャンスが多くあるようです。また、研究生活では、お互いを尊重しながら自由闊達な議論ができるのも本学の特色といえます。

お茶の水女子大学は、東京女子師範学校(1875年設置)を前身とし、130余年にわたって先駆的な教育者や研究者を育成してきました。そして現在では、教育・研究分野に限らず、公的機関・生産・流通・メディアなど、多様な分野で活躍する多くの卒業生を輩出しています。

しかし日本の社会全体では、国際的にみて女性の活躍の割合が著しく低く、とくに意志決定過程に占める女性の割合が低いことが問題視されています。そこで、女性の社会的活躍をさらに促進するために、国の方針として、「2020年までに指導的地位に占める女性の割合を少なくとも30%にする」ことが決定されました(2003年6月男女共同参画推進本部決定)。女性の高等教育進学率が40%を超えているのに対して、女性の管理的職業従事者の割合は10%台にとどまっていることは、高等教育への社会資本の投資効果の点でも問題とされます。

この方針の意味は、単に活躍する女性の数を増やすことだけではなく、女性が社会的に活躍することによって、多様性のある豊かな社会を築くことを目指していると、私は理解しています。

本学は2006年に「女性リーダー育成プログラム」を開始しましたが、このプログラムの意図もそこにあります。

―リーダーシップ教育―

リーダーとはどのような存在であり、リーダーシップとは何を意味するのでしょうか。

リーダーの在り方については、大きく二つの考え方があるように思います。一つは、組織の頂点で権力を集中させる在り方、他は、組織の基盤を支える在り方です。リーダーというとき、一般的には前者を念頭に置いていることが多いようです。この場合、リーダーシップは上から下への指示を徹底することが重要です。それに対して、「サーバント・リーダーシップ」ともいわれる後者は、組織活動の末端あるいは最前線の視点を重視するものです(cf. 池田守男・金井壽宏「サーバント・リーダーシップ入門」かんき出版 2007年)。

どちらの場合も、組織全体を掌握する点は同じですが、主眼の置き方が異なります。

これらに対して、「リーダーシップ・アンサンブル」という考え方もあります。これは、指揮者のいないオーケストラをモデルに、構成員が相互に協調しつつ、時に応じて誰かがリーダーの役割を担うような組織の在り方です。(cf. H. Steifter& P. Economy, *Leadership Ensemble, Lessons in Collaborative Management from the World's Only Conductorless Orchestra*, Times Books, 2001)

「リーダー」「リーダーシップ」の概念は、このように多様なのです。

お茶の水女子大学の学生には、高校時代から「リーダー」としてリーダーシップを発揮してきた学生も多くいますが、「リーダー」という言葉に抵抗のある学生もいます。その理由は、「リーダー」を、強権によって組織を牽引する存在、と考えているからのようです。

本学のリーダー育成では、「知性」「心遣い」「しなやかさ」をキーワードとしています。確かな知性を習得することを大前提に、他者を尊重し自らを尊重し、そして多様な状況の変化に対応できる柔軟で強い意志をもつことを学生に期待しています。とくに本学の卒業生は、社会の様々な場で活躍しており、その姿は学生の格好のロールモデルになっています。女子学生が多様な将来モデルに身近に接することができるのは、女子大学の大きな特色でもあります。

ー社会へ、世界へー

大学は社会的存在です。同時に大学は常に国際社会の動きにも敏感でなくてはなりません。

そこで、社会とのインターフェイスの場を構築したいと考え、2011年4月には、正門脇に「お茶大インフォメーション・プラザ」を開設しました。本学がこれまで地域との連携に積極的に取り組んできた、その象徴ともいえるでしょう。

また、国際性を強化するために、大学間交流協定の締結を進め、学生の海外派遣プログラムを充実させることにも本学は力を入れています。

さらに、本学の途上国女子教育支援は、国立大学の中でもとくに高く評価されている事業です。昨年は、学生のアイデアを取り入れて大学グッズを新たに製作しましたが、その際に、売り上げの一部を途上国の女子教育支援に役立てるようなシステムも作りました。これは、学生の意識が既に国際的な視点にあることの一つの証といえます。

ー共に、未来へー

2011年3月には、新しい学生寮「お茶大Students Community Commons」を竣工しました。この寮の理念は「共に住まい、共に学び、共に成長する」です。これに先立って2007年には、大学附属図書館に「ラーニング・コモンズLearning Commons」というスペースを作りました。図書館のこの機能は多くの大学図書館の先駆けとなりましたが、そこでの理念は、「共に学び、共に成長する」でした。

このように、本学が重視しているリーダー育成事業の根底にある考え方は、「共に在る」ことです。今年3月11日の大震災と、その後の原子力発電所の事故による甚大で悲惨な被災状況に接し、国立の高等教育機関として果たすべき役割を今も模索し続けていますが、学問の在り方と教育の在り方が問われていることは確かであり、そして何より明らかなことは、「共に在ること」の大切さです。

お茶の水女子大学でも200名を超える被災地出身の学生が、このキャンパスで学んでいます。彼女達を含めたすべての学生・教職員と共に、そしてこれから入学する学生と共に、大学と学問の在り方を追求し、少しでも豊かで明るい未来を築くことができるよう、微力を尽くしたいと思います。

2011年秋

お茶の水女子大学長
羽入　佐和子

学長からのメッセージ
共に、未来へ。